

東京バッハ合唱団 月報

[第 763 号] 2026 年 1 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp Site: http://bachchor-tokyo.jp



BACH-CHOR TOKYO

Monthly Newsletter No.763

January 2026

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

日本語で歌う“よろこび”の歌、「クリスマス・オラトリオ」

田所 功 (団員)

毎年演奏会で「クリスマス・オラトリオ」の演奏が始まると、なぜか胸のあたりがジーンとしてくるのです。今年もそうでした。クリスマスの時期に日本語でクリスマス・オラトリオを歌うことができますこと、大村先生のおかげと感謝申し上げます。

約 2000 年前の幼子イエスの誕生は静かなものだったことでしょう。大人になったイエスが神の言葉を述べ伝え、「イエス・キリストは素晴らしい人だ」と従った弟子たちを、イエスは「全世界に行って福音を述べ伝えよ」と派遣しました。その後、世界中でイエス・キリストの誕生をお祝いするようになり、18 世紀に J.S. バッハは「クリスマス・オラトリオ」を作曲しました。

ここでちょっとクイズです。第 1 問、「クリスマス・オラトリオ」の第 1 曲合唱の歌い出しの歌詞は何でしょう？ 第 2 問、前半部分の最後の曲、第 35 曲コーラルの歌い出し（松尾さんが思い切り引っ張る所）の歌詞は何でしょう？ 答えは、「よろこべや」と「よろこべ」です。この曲はキリスト誕生のストーリーを伝える“よろこび”の歌なのです。

皆さんもよろこびを持って歌うことができましたか？ 無事歌えたよろこびや、この時期に歌えるよろこび。それ以外にも様々なよろこびを感じながら歌うことが出来たのではないのでしょうか。私は「キリストに繋がっているよろこび」もあると思うのです。だから胸のあたりがジーンとしてくるのでしょうか。

この曲は、クリスマスの時期にキリストのストーリーを述べ伝えるに相応しい曲です。これからも、毎年歌い続けていきましょう。

Merry Christmas、そして良いお年をお迎えください。



■満堂のコンサート全景（三崎町教会 2025/12/6、撮影：千葉光雄）

一緒に、新年を受け取りましょう

大村 恵美子 (主宰者)

また数日後には、新しい年に入っていきます。その来年は、私たちにとって何をもたらしてくれるのでしょうか？

ここ数年の足どりで、私たちはどんな変化を、それぞれの生活に及ぼされたのでしょうか？

思いがけない変わりようを、僅かな日数のうちに持ち込むこともあり、また、何の変哲もないような足取りが、私たちを、変わり映えのしない日々に関じ込めてしまう場合もあります。

今の私には、そのどちらともはつきり想像が付きかねますが、何か期待を描かせそうな面白みを味わえる成り行きを、考えているところです。

パッと変わりのあるような将来をここに秘めつつ、新年を受け取ることにいたしましょう。

東京バッハ合唱団の第 2 楽章、スタート

編集部

新年のご挨拶をお届けします。

ここ新年号は、主宰者の口上から始まるのが常でしたが、「長い文章を纏めるのが苦手になりました。ご勘弁ください」の一言を添えさせていただきます。

年末のクリスマス・コンサート (12/6) とシングイン (12/13) を無事終了し、東京バッハ合唱団の新体制が順調にスタートしたことを先ずはご報告します。

主宰者も両日とも来聴することができ、三崎町のリハーサルでは、「コーラス、もっと楽しそうな顔で！」と、変わらぬゲキ。いつも通りです。本番では、松尾氏の指揮を頼もしそうに眺めていました。

昨年 6 月の「指揮者引退のご挨拶」(月報 756 号)に、「新体制は、必ずや、第 2 楽章を、これまで以上に盛り上げて下さると信じております」とありました。お読み返しただければ幸いです。

月報 2026 年 1 月号 CONTENTS

- ・「クリスマス・オラトリオ」アンケート回答…… p. 2-3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [59] (大野博人) p. 4

バッハ《クリスマス・オラトリオ》 [抜粋 2025年版]による クリスマス・コンサートとシングイン

2回公演の両日、いずれも満堂のご来場をいただき、暖かい応援の拍手をお送りいただきました。また、会場のご提供と運営へのご協力をこころよくお引き受けいただきました三崎町教会、荻窪教会のみなさまには、こころより御礼を申しあげます。

それぞれ多数のアンケート回答をいただきました。今後の活動に活かさせていただきます。今回は、類似内容も含め、全回答を掲載させていただきました。

ご協力、ありがとうございました。

<アンケート回答>

三崎町教会（12月6日） クリスマス・コンサート

◇企画全般について、ご意見をお聞かせください

- ・暖かみのあるコンサートでした。オケも合唱も良かったです。
- ・大変良かったです。
- ・素晴らしい演奏でした。
- ・管弦楽があり、楽しく聞かせていただきました。
- ・コンパクトな「クリスマスオラトリオ」。おもしろかったです。
- ・とても良かったです。

—終了報告—

バッハの《クリスマス・オラトリオ》による コンサートとシングイン 2025

三崎町教会、12/6（土）コンサート形式
荻窪教会、12/13（土）シングイン形式
（いずれも 14:00 開演・入場無料）

- ・指揮：松尾茂春
 - ・管弦楽：ARS（コレギウム・アルモニア・スペリオール・ジャパン）
 - ・オルガン：田尻明葉
 - ・合唱：東京バッハ合唱団
- [協力] 三崎町教会（12/6）、荻窪教会（12/13）

<演奏参加者>

合唱団：23名（内、1名指揮者）、オーケストラ：22名、
オルガン：1名

<来場者>

三崎町（12/6）：108名、荻窪（12/13）：35名（残数より）

<カンパ収入>

三崎町（12/6）：28,180円、荻窪（12/13）：24,905円

- ・力強い4声合唱で、勇気づけられた。
- ・このシーズンにぴったりの曲を、毎年楽しみにしております。

・福音史家の朗読が入って、分かりやすくなりました。バッハに限らず、いろんな作曲家の歌（コラール）がまじっているのですね。ありがとうございました。すばらしかったです。

- ・とても良かったです。
- ・大変良かった、こころがいやされました。

◇とくに、日本語演奏について

- ・理解しやすい。
- ・日本語でもバッハの合唱曲の迫力は変わらないようでした。
- ・わかりやすかった。
- ・内容の理解にすぐれている。
- ・違和感がないので、不思議です。
- ・日本語を用いること、大賛成です。カンタータが普及しないのは、歌詞が不明だからだと思う。讚美歌も歌詞が判らねば、こころから歌い得ない。ぜひ日本語でバッハを！

・邦訳が用いられることで、バッハ音楽のメッセージ性が高まり、感動しました。

- ・もう少し言葉が伝わってきて欲しい。
- ・わかり易くて良いです。
- ・文語の音のやわらかな、美しい日本語に訳されていて、言葉一つ一つが琥珀のようで癒された。
- ・良いと思います。
- ・内容が理解でき、すばらしいと思います。
- ・良いと思います。テキストを見ても、どこを歌ってるか追えるので。
- ・歌詞を日本語で聞けることは良いことです。
- ・意味が分かるので有難いです。
- ・内容がよく分かり、良かったです。

◇その他、本日の運営全般、会場等について、何でも

・オルガンの音が少し聞こえづらかったかも知れませんが、

- ・良い会場だと思いました。
- ・アリアを斉唱または合唱で歌うのは、いいですね。普及すれば愛唱曲となるでしょう。名曲アリアの合唱コンサートもいいと思います。名人でなくとも、人の唇からもれる歌になりそう。

- ・実に細やかな指揮でした。
- ・とても良い会場。運営も心がこもっており、良かったです。

・前方席のせいか、楽器の音が思ったより大きく、耳に負担だった。後方席が良いと思った。

・会場が広くはないので、音はもう少し小さい方が良かった。

・ふさわしい所でふさわしい曲を聴くことが出来、嬉しく思います。

・会場がきれいで素晴らしいです。

- ・とても暖かい気持ちになりました
- ・駅から近く、わかりやすい場所だと思います。

◇当コンサートを、何でお知りになりましたか？

友人/知人(家族ふくむ)から…9人、当合唱団からのDM…6人、ウェブサイトを見て…2人、チラシを見て…1(全19通のうち)

◇何回目のご来聴ですか？

数回以上…10人、初めて…7人、2回目…2人(全19通のうち)

荻窪教会 (12月13日)

《クリ・オラ》 シングイン (第5回)



■参加者とともにオラトリオを歌う。指揮：松尾茂春、オルガン：田尻明葉、管弦楽：ARS(手前ギャラリー上にトランペット群が活躍)
(荻窪教会 2025/12/13、撮影：本田茂樹)

◇企画全般について、ご意見をお聞かせください

- ・素晴らしい、ありがたい企画でした。
- ・音に厚みがあり、気持ちよく楽しめました。
- ・美しい声と演奏でした。

◇とくに、日本語演奏について

- ・気持ちを込めて歌うこと(聴くこと)が出来ると思っています。
- ・良かったです。

◇その他、本日の運営全般、会場等について、何でも

- ・居心地良く思いました。
- ・落ちついた空間で、気持ちよく過ごせました。
- ・ちょっと会場が寒かったです。

◇当コンサートを、何でお知りになりましたか？

チラシを見て…1人、友人/知人から…3人

◇何回目のご来聴ですか？

初めて…1人、数回以上…3人(全4通のうち)

今回の初の試みとして、両会場とも、物語の筋の運びは現行の聖書ではなく、原曲のエヴァンゲリウム(ルター訳福音書)を、大村恵美子訳詞によって朗読しました。またその際、オルガンには、歌詞の展開に応じて、原曲の調性のなかで和音を奏し、朗読を支えていただきました。これは好評だったようです。一つの演奏スタイルとしての定着を望みます。

アンケート回答から見てとれる

バッハ日本語演奏、定着の兆し

三崎町教会(12/6、コンサート形式)と荻窪教会(12/13、シングイン形式)とで、《クリスマス・オラトリオ》抜粋版による、二様の音楽会を開催しました。

その両会場でのアンケート回答を拝読させていただきながら、ここ数十年の、お客さまの反応の変化に、改めて目を見張っています。とくに、われわれの日本語演奏に関しての設問へのご回答ぶりです。

“バッハ生誕300年祭”(1985年)を迎えるころから“歿後250年記念年”(2000年)前後までの、バッハ熱の昂揚期をはさんで、日本語上演に関する関心は変貌します。

それ以前、当団草創(1962年発足)からの20年ほどは、バッハ・カンタータを中心に据えて活動するコーラスなど、国内では当団以外に存在しなかったし、このジャンルの存在も一般には知られていなかった。ですから、これらを原語で聴きなれている→訳詞演奏には抵抗を感じる、という方は少なかったようです。われわれの演奏会場に足を運んでくださった方々は、これがバッハ、と、素直に受け止めてくださったようです(良いか悪いかは別として)。リヒター氏がミュンヘンバッハを率いてマタイ受難曲を初演奏(1969年、東京)した当時、「ホンモノが来日しますね」と、嬉しそうにお教えくださった方もいらっしゃいました。

バッハ熱の始め、リング氏を迎えてのバッハ講習会(1983年)のころから、おかげさでなく「津々浦々」に都市名を冠したバッハ合唱団が誕生し、当合唱団も改名を余儀なくされました(1985年、「東京」を冠す)。

ドイツ語発音の特訓を受けつつ、バッハ・カンタータを歌い始めた方々が、それこそ100人、1000人と現れたのではないのでしょうか。慶賀すべきことです。かくして1990年代くらいから、わが国はバッハ合唱演奏の隆盛期を迎えました。古楽奏法の上演もひろく認知され、わが国でも一般化しました。「バッハ当時の奏法」「バッハの欲した響き」(聞いた人は誰も生存していませんが)を再現、という動機はすばらしいものです。

ここに至れば、原語(バッハの言葉、ドイツ語)で歌い、原語で聴く、これ以外に選択の余地はなくなったようです。このころのアンケートでは、日本語歌詞に違和感、ドイツ語の質感がなく不満、音楽に合わない、あり得ない、等々、散々な反応をいただいたものでした。

それでも、長くやってみるもんです。権威のラテン語を去り、信仰のドイツ語(こころの母語)をとった改革者ルター、その精神に倣うバッハの音楽に、ひとりまた一人とお集りくださって、ここ十年ほどは、今回の回答の姿に至っています。多くの国で、それぞれの母語によるバッハ演奏が栄えることを望みます。

今回のいずれの会場でも、最後に大村恵美子訳詞のクリスマス・コラール2題「いぶせきうまやに/光みちみちて」(オラトリオ第7曲)と「ながかたえに立たん/イエスわがいのち」(同第59曲)とを、参集の全ての方々と一緒に合唱して、ステージを閉じました。(編集部)

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [59]

「不在」の耐えられない重さ



安曇野閑人 大野 博人

私の父は特攻隊員だった。

終戦直前まで訓練を受けていたが、出撃前に日本が降伏したので命拾いしたそうだ。父からはじめて聞いたのは14年前。入院先の病室で話してくれた。

医師によると、治療はむずかしくないはずだったが、突然に体調を崩し、まもなく他界した。享年88。高齢ではあった。

父が戦時中について話すことはあった。学徒動員だったことや中国の旅順で訓練を受けたことなどは知っていた。が、特攻隊の経験は聞いた覚えがなかった。

入院していたのが8月。その流れで、病室での会話が終戦の日のことに及んだ。

どこにいた、と聞いたら、高知だという。

「どうして？」

「訓練を受けていた。特攻の」

「えっ。じゃあ、おやじは戦闘機の操縦ができたの？」

「いや、飛行機じゃない。爆弾を積んだモーターボートで敵艦に体当たりする部隊だ」

驚いたが、父は入院中だ。詳しい話は退院したら聞いてみようと思った。その機会を逸してしまった。

以来、気になっていた。

父が学徒動員をはさんで大学で学んだのは建築だった。戦後は建築士の資格を持つ公務員として兵庫県庁などに勤務した。退職後も神戸で団体や企業で働いた。その世代のふつうの勤め人としての人生だった。

戦争体験のトラウマなどを抱えているような気配を感じたことはなかった。ただ、振り返ると思い当たることがないでもない。政治的にはどちらかというところ保守的な考えをしていたが、ときどき「戦争だけはいかん」と言うことがあった。それに、私と弟の進学や将来の職業の選択について、口を出すことがほとんどなかった。基本的に「好きなようにすればいい」と寛容だった。

死ぬ覚悟を余儀なくされながら、そこから突然解放された若い日の体験。衝撃的だったはずだ。何か吹っ切れたのか。だから、子供たちは「好きなように」生きればいい、と思ったのかもしれない。

父のいた特攻隊のことを少し知りたくて、本を読み、今年の11月には部隊のひとつが置かれていた高知市に近い現場を訪ねた。

この特攻隊は「震洋」と呼ばれた。海を震わせるといふ勇ましいネーミングだが、戦争末期、航空機を作ることもその燃料を調達することもまもなくなくなった軍が苦し紛れに編み出した作戦だ。ベニヤ板製のボートにトラックのエンジンを取り付け、爆薬を積んだ

だけ。兵器としてはお粗末極まりない代物だった。十代、二十代の若者たちが、そんなボートに乗って海の藻屑となるための訓練を受けていた。

終戦の翌日、1945年8月16日、そんな理不尽から逃れたはずだった多くの若者たちに悲劇が襲いかかる。土佐湾に面した震洋の基地で爆発事故が起きて111人が犠牲になったのだ。

その日、四国沖に接近している米軍艦隊を迎撃せよとの指令が部隊に届く。戦争は終わったはずでは、といぶかりながらも兵士たちは大急ぎで準備に取りかかった。

しかし、安全軽視の体制の中で、何かの火花が給油中のガソリンに引火。次々と燃料タンクや火薬の誘発を引き起こしたらしい。集まっていた若者たちは焼かれ、吹き飛ばされた。海岸には凄惨な光景が広がっていたという。

実際は、米艦隊接近の情報は誤報、出撃司令も伝達経路があやしかった。軍は正確に偵察する能力も停戦命令を末端に行きわたらせる機能も失っていた。まともな組織の体をなしていなかった。加えて、敗戦のどさくさにまぎれて事故の原因解明と責任追及も行われなかった。国家は最低限の規律さえ果たさなかった。

父はそのとき近くにいたのか、別の拠点にいたのか。いずれにしろ、巻き込まれることなく戦後を迎える。

事故があった高知の浜には小さな漁港があり、近くに慰霊碑が建てられていた。

あのとき終戦が遅れ、父が出撃していたら、あるいは父が事故現場に居合わせていたら、私は生まれなかった。私の家族も存在しなかった。犠牲者111人とは、彼らに続いたはずの家族が存在しなくなったことも表す数字だ。「不在」の耐えられない重さ。

目の前で、まだ陽光に輝く海を眺めながらそんなことを考えた。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)

■震洋部隊の犠牲者慰霊の像。飛行機で散る覚悟をしていた若者たちを落胆させないために、飛行機を着用させたという。(写真の提供と説明、いずれも筆者)

